マツダ病院 QCサークル活動報告書

サークル名	リハビリ FIVE		発表者	廣田 康成
			リーダー	廣田 康成
部署	リハビリテーション科		サブリーダー	神山 拓也
活動期間	2024年5月10日~2025年2月17日		メンバー	梶山 美和子,古村 加代
会合状況	会合回数	24 回		政信 博之,高宮 啓太
				北坂 彰彦,川口 将志
	1回あたりの会合時間	40~60分		山崎 重人(オーナー)
				平野 容子(アドバイザー)
テーマ	「リハビリでできる ADL」と「病棟でしている ADL」の乖離の低減			

1.テーマ選定

リハビリ科では、日々入院患者へのリハビリを実施し、日常生活動作(以下、ADL)機能向上を図っているが、病棟で実際にしている ADL に反映できていない事が多いと感じ、問題と感じていた。そこで、病棟での患者 ADL についてメンバーでブレーンストーミングを行った。総合評価から「リハビリでできる ADL」と「病棟でしている ADL」の乖離の低減を今回のテーマとした。

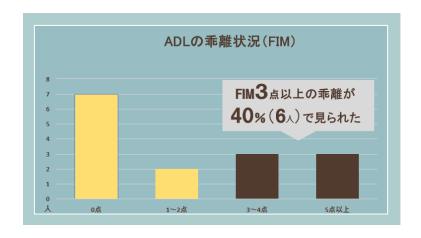
	重要度	緊急度	実現性	上位方針	総合得点
「リハビリでできる ADL」と 「病棟でしている ADL」の乖離	©	©	0	(20
Ns と情報の共有が出来ていない	0	0	\bigcirc		18
病棟生活での離床が不十分	0	0	Δ	0	15
病棟 Ns がリハビリで患者が どこまで動けるのかを知らない	0	0	Δ	Δ	13

マトリクス図

2. 現状把握

- ①リハビリテーション科スタッフ 23 名、地域包括ケア病棟看護師 26 名に対し、ADL に関する情報共有の状況についてアンケート調査を実施
- ②期間中に地域包括ケア病棟に転棟した患者に対してADLの乖離状況をFIM(機能的自立度評価)にて評価を実施 リハビリスタッフがADLの乖離を感じている項目は、歩行、車いす移乗、トイレ移乗、トイレ動作の4項目で約70%を占 めており、看護師のリハビリとのADLの情報共有で困っている項目は歩行、移乗、トイレ動作の3項目で約60%を占め ており、項目が一致していた。

また、ADL の乖離状況は、トイレ動作に 66%、歩行・車いす移乗に 55%、トイレ移乗に 44%で乖離を認めた。 各項目の FIM の差を表すと、3 点以上の乖離が 40%で認めた。

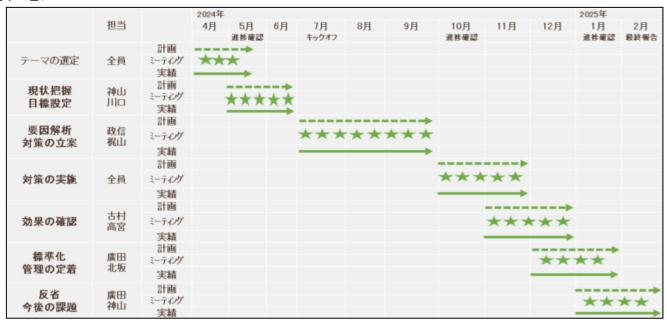


3.目標設定

目標を「リハビリで出来る ADL」と「病棟でしている ADL」の 3 点以上の乖離を認めた患者の割合を 40%から 0%にすることに設定した。

4.活動計画

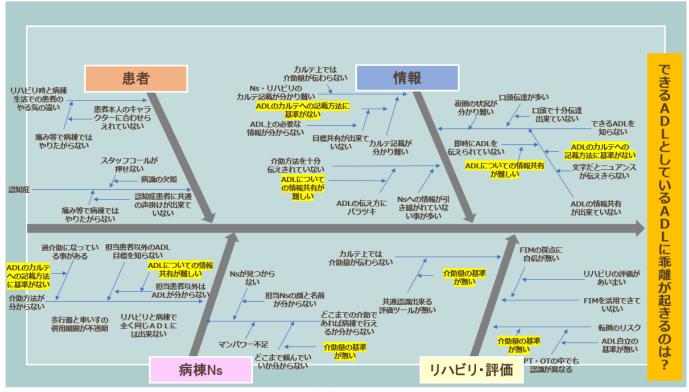
下表の通り



活動計画表

5.要因解析

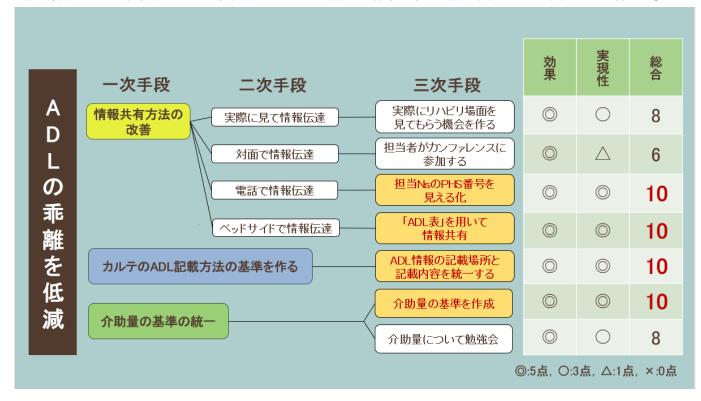
特性要因図から、「ADL についての情報共有が難しい」、「ADL のカルテへの記載方法に基準が無い」、「介助量の基準が無い」の3点が抽出された。



特性要因図

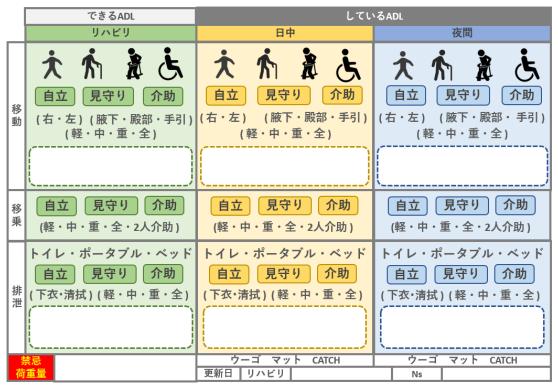
6.対策の立案

要因解析の3点を改善するために、系統図を用いて対策を点数化し、重要度の高いものを対策として立案した。



7.対策の実施

①「ADL 表」を作成し、リハビリスタッフ、看護スタッフが「リハビリでできる ADL」と「病棟でしている ADL」を記載。 ベッドサイドのカーテンに設置し、介助する前に確認できる様にした。

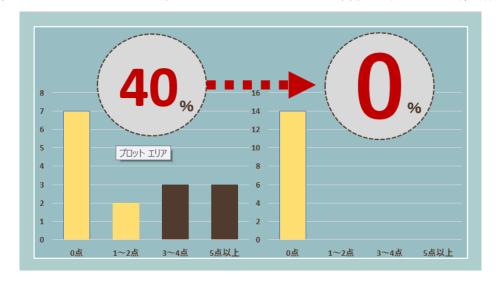


- ②リハビリカルテ、看護カルテの ADL 情報の記載場所と記載内容を統一し、カルテ上でも ADL 情報を記載し、分かりやすくした。
- ③介助量の基準を作成し、誰が介助しても同じ介助量になる様に標準化した。
- ④担当 Ns の PHS 番号を見える化し、見つからない時などに電話でも ADL 情報を伝えやすくした。

8.効果の確認

[有形効果]

下表のように、リハビリでできる ADL と病棟でしている ADL のFIMでの乖離は 0%ととなり目標達成した。



[無形効果]

リハビリスタッフで、患者 ADL が拡大している印象、ADL 表やカルテ上での情報共有が強化されたという意見があり、 看護スタッフでは、受け持ち患者以外でも ADL 表があれば対応できる様になった、ADL 情報を詰所に戻ってカルテ を見たり聞いたりしなくても良くなったという意見が聴かれた。

[波及効果]

「ADL 表」でできる ADL・している ADL が分かりやすくなりましたか?という質問に、リハビリスタッフで約85%、看護スタッフで約70%分かりやすくなったと回答。

また、患者の出来る ADL を知っていますか?という質問に現状調査時には30%知っているとありましたが、約80%へ改善を認め、受け持ち患者以外でも0→25%へ向上し、出来るADLが伝わりやすくなったことが分かりました。

9.標準化と管理の定着

下表の通り

	なにを	だれが	いつ	どこで	なぜ	どうする
標準化	介助量の基準を	5 階担当者が	12 月中	病室, PC 上で	ADL を しっかり 伝えるために	作成した
理	ADL 表を カルテ記載を	QC メンバーが	6 か月に1回	5階で	記載内容を 改善するために	検証する
教育	ADL 表の使い方を ADL についての カルテ記載方法を	新人指導者が	指導中	新人研修で	ADL の情報 共有のために	指導する

10.反省と今後の課題 下表の通り

	良かった点	反省•課題
テーマ選定	回復期設立に関するテーマを選定できた	_
現状把握	実際に行われている ADL の乖離, リハビリと Ns での ADL に対する認識の乖離 を調査することができた	経験年数や他病棟でも調査を考慮すべきであった
目標設定	FIM の合計点の差が大きいところに着目で きた	_
要因解析	特性要因図から真の要因を追求できた	メンバーの意見をまとめるのに 時間を要した
対策の立案・実施	介助が必要な患者の ADL を見える化でき た	ADL 表の掲示だけでなく,ADL 場面を 見る機会を増加する必要がある
効果の確認	ADL の乖離を0%にできた	すべての ADL 項目に対する追加対策は できなかった
標準化と管理の定着	リハビリ・Ns 間のコミュニケーションツールが 増加できたことで情報共有が図りやすくな った	回復期リハビリ病棟への展開

報告文作成ガイド(「医療の改善活動」全国大会の報告文作成ガイドに準じています)

- (1)原稿はA4縦型。
- (2)ページ数は、図表を含めて 4 ページ~ 8 ページを目安にしてください(8 ページ以内厳守)。 ページ番号 を原稿の下・中央に入れてください。
- (3)各ページに 規定(上下各2cm左右各 1.5cm)以上の余白をあけて記入してください。本文のフォントはなるべく MSP 明朝体/サイズ 10.5 でお願いいたします。
- (4)適宜、表や図を添付してください。
- ➤ 図表は本文中の該当箇所に作成または貼り付けてください。 図表には見出しを 付けてください。
- ➤ 品質の高い出力方法による細かいアミ点、もしくはレーザープリンターのカラーモードで出力したグレーは、PDFファイルで正確に表示されない場合があります。提出前にご確認ください

本文の構成について

➤ QC ストーリーを使った発表

活動のステップに即して見出しをつけ、改善の手順がわかるように記述してください。

➤ QC ストーリーを使わない発表

構成は自由ですが、なるべく以下の事項を含むようにお願いします。

①改善に取り組んだ課題/問題、②実施体制(この取組みを実施・推進したチーム、部署、委員会等)、③達成目標/実現しようとしたこと、④方法、⑤結果、⑥考察(この取組みの特徴、よかったこと、教訓、アドバイスなど)